



Contents

- キリスト教講演会（前期）
私の研究の原点
——メアリ・E・キダ
- スタディツアー報告
- サマーリトリート報告

「悔い改める」とは？ 戦後 80 年の時に考える 相澤 一（宗教主事）

今年（2025 年）は第二次世界大戦（太平洋戦争を含む）が終了してから 80 年という、節目の年になりますが、まさにその節目の年の 8 月 6 日、広島に原爆が落とされた日に、フェリス女学院大学ではサマーリトリートが持たれました。

プログラムの中で、讃美歌 21 444 番「気づかせてください」が学生によって独唱されました。444 番には、このような歌詞があります。

気づかせてください、知らずに犯した罪を。
与えてください、罪を見つめる力を

今年の 8 月 15 日に、天皇が戦没者追悼の式典において「戦中・戦後の苦難を今後とも語り継ぎ……平和と人々の幸せを希求し続けていく」と語りましたが、「戦中・戦後の苦難」というのは、誰の苦難のことでしょうか。毎年、8 月 15 日が近づくと、テレビやネットで「戦争の記憶を引き継いでいかなければならない」と盛んに言われますが、そこで語られるのは、ほとんど戦争の被害者としての記憶ばかりです。しかし日本には、戦争の加害者という面も確かにあります。それは語り継がないのでしょうか？

今年の夏、ゼミの合宿でタイに行き、「戦場に架ける橋」の舞台となったカンチャナブリーに行き、泰緬鉄道に乗車しました。泰緬鉄道は戦争中に日本軍が敷設した鉄道ですが、大変な難工事であり、労役に駆り出された敵軍の捕虜たちや現地人たちが次々と亡くなり、「枕木一本につき死者一名」「死の鉄道」とも呼ばれたそうです。しかし、現地ガイドによると、カンチャナブリーに日本人が来ることは滅多にないそうです。私たちは、「与えてください、罪を見つ

める力を」という祈りを真剣に祈る必要があるのではないかと考えずにはいられませんでした。

「放蕩息子のたとえ」（ルカによる福音書 15 章 11～32 節）について、ある牧師が「悔い改めは、帰って来た放蕩息子を抱きしめる父親の腕の中で行われる」と語っています。悔い改めは関係回復の始まりであるだけでなく、関係回復の中で絶えずなされ、さらに、回復された関係の維持の中で悔い改めが「通奏低音のように鳴り響く」とも語っています。

かつてシンガポールのリー・クアンユー初代首相は、戦時中に日本がシンガポールで行った、現地人に対する残虐行為について「Forgive, but never forget」と語りました。日本には、戦争中の日本の戦争加害を語ることを「自虐史観」と批判する向きもないわけではありませんが、それは「罪を見つめる力」の欠如の自己正当化ではないのでしょうか。現在の日本は、アジアの多くの国とはいい関係を持つことができています。しかしそれは、アジアの人々が、決して Forget できないことを Forgive してくれているから成り立っている友好関係であり、日本が、戦時中にアジアでしたことを Forget してしまっただけではいけません。

讃美歌 444 番の 3 節に「歩ませてください、まことの平和の道を」とありますが、もし日本がアジアの国々と「まことの平和の道」を歩もうとするなら、日本は、被害だけでなく加害の過去も引き継ぐ必要があります。そのうえで、アジアの人々に対して、彼らの赦しのうえに関係が成り立っていることを忘れず、そのことに感謝しつつ、絶えざる悔い改めの歩みを歩まなければなりません。それが、これからの日本が歩むべき「まことの平和の道」となるでしょう。

私の研究の原点 ——メアリ・E・キダ

小檜山 ルイ（フェリス女学院大学学長）

フェリス女学院大学の学長に就任する前、私は東京女子大学に教員・研究者として奉職していました。研究は私の日常のほとんどを占めていた仕事でした。何を研究してきたかという、日米関係の当事者だった女性たちの研究、とりわけ、海外伝道に関わった女性たちの研究です。

そう、本学の創立者メアリ・E・キダは、海外伝道という、アメリカでは19世紀初頭に始まった運動に則して、来日し、女子教育を始めた女性でした。私の研究テーマにぴったりです。それもそのはず、この研究を始めたのは、メアリ・E・キダがきっかけだったのです。

皆さんご存知だと思いますが、私はフェリスの中高の出身です。私が中高生だった頃も、今と同じように毎朝礼拝がありました。チャペルの入り口のところにフェリス父子とキダの写真が掲げてあって、毎朝それを見て、“For Others”を耳にしたことができるくらい聞いて10代を過ごしました。50年も前の話です。それから50年間、ついこの前まで中高の教育内容がほとんど変わらなかったのは、全く驚愕です。最近、それでは時代の要請に応えられないということで、中高でも改革が進められています。大いに期待しています。

中高生時代の私は、従順ではありませんでした。キリスト教も“For Others”もうさんくさいと思っていました。「他者のために」生きるなんて、人間にはとてもできないことで、そもそも何かをして、それを「他者のため」と意味づけるなんて、おこがましい、と思っていました。聖書の物語は、不可解そのものでした。処女で妊娠するなんてありえるのか、イエスが十字架にかかって死んだことが、なぜ全人類の罪の許しにつながるのか、分からないことだらけでした。

とりわけわからなかったのは、こういうことを信じる人々が世界中にいて、キリスト教が2000年にわたって続いてきたということでした。

わからないから、知りたい——私は好奇心が強いので、宗教を退けるのではなく、逆にそれは関心事の一つになりました。英語を道具として使いこなせるようになりたくてICUに入りましたが、卒論は、霊友会という仏教系の新興宗教の研究でした。アメリカの大学院に進んで、アメリカ教育の修士号取得のために3本要求された論文の一つはモルモン教に関するものでした。帰国して、ICUの比較文化研究科の博士課程に入り、3年の課程を終える頃、博士論文のテーマを決める段階になった時、ハテ、どうしようかと思案したとき、メアリ・E・キダのことが思い浮かんだのです。

なぜ、日本まで来たのだろう？

今日、読んでいただいた聖書の箇所は、「キリストの天命」でありまして、復活したイエスが福音を述べ伝えることを弟子たちに求めたものです。通常、宣教師はこの「天命」に従って世界中に赴いたのであり、伝道は、信仰の深さ故の献身であると説明されます。それは、むしろ前提としてあるだろうけれど、私は、それだけで説明を終えて良いものか、と考えました。このキダをめぐるテーマは、私がかねてから関心をもっていた領域、宗教と女性と文学が交差する格好のテーマであるとも思えました。キダは、フェリスを離れた後、子ども向けの雑誌の編集をしていましたし、キダに育てられた若松賤子は、翻訳者、児童文学者でもあったので——若松の作品はつまらないとずっと思っていました。——文学にも関連付けられそうでした。それに、フェリス中高に学んだことから、ミッション・スクールについての土地勘がありました。これは研究をする上で結構大事なことです。私は、研究というのは、自分の経験に結びつけ

られなければ、長続きしないと考えています。流行のテーマに飛びついて、それに内在的な関心がなければ、あるいは、それが自分事でなければ、研究につきものの辛抱が続かない、と思うわけです。

テーマは決めたものの、その後すぐに関東学院大学に英語の教員として雇っていただき、子どもを産んだりして、しばらく博士論文は放置していました。子どもが7ヶ月になった頃、課程博士号を取るためには、あと3年以内に博士論文を提出しなければならぬことに気づき、あわてて調査を開始しました。

最初に行ったのは、もちろんフェリスの資料室（今の歴史資料館）です。当時すでに『キダ書簡集』——キダがアメリカの家族に送った手紙です——は出ていましたが、博士論文を構成するのに十分な量の一次資料はないことがわかりました。そこで、横浜のミッション・スクール——成美（今の青山学院横浜英和）や捜真、共立——を訪ね、青山学院や立教女学院にも問い合わせました。当時、どこも資料を持っていませんでした。関東大震災と戦災で、ほとんどの学校の昔の資料は失われていたのです。共立を作ったWUMS（婦人一致海外伝道協会）の、アメリカにある後継団体には手紙を書いて資料について教えてもらいましたが、私が欲しい年代のものはあまりないようでした。

そこで、次に目をつけたのが開港資料館のオランダ改革派の宣教師書簡でした。すでにフェリスの資料室で使い始めていたからです。何度か通ってリストを作ったりしましたが、女性宣教師の手紙はキダのものも含め、ほんの少ししかありません。それで、開港資料館にあった長老派の宣教師書簡も見ってみました。女性宣教師の書簡が結構ありました。しかも、この書簡群にはカレンダーがついていて、各書簡の要約がタイプされていて、圧倒的に必要な書簡を見付けやすいのです。そこで調査の中心を長老派の女性宣教師に変えて、手紙をコピーして読み進めました。主に今の女子学院を作った女性宣教師たちの手紙です。およその見当をつけたところで、アメリカに資料調査に行きました。

子どもを私の母に預けて、2週間。今振り返ると、決死の覚悟です。当時はemailなどありませんから、行きたい資料館や図書館に手紙を書き、アポイントメントを取りました。それから、メアリ・E・キダの子孫のマーガレット・ナイト夫妻にも手紙を書き、ご自宅に泊めていただくことになりました。

最初に行ったのはフィラデルフィアの長老派歴史協会です。1980年代の後半、まだ訪ねる日本人が少なかった頃。女性宣教師は婦人伝道局という女性の海外伝道のための団体に支援されていたことはすでに調査済みでしたが、長老派の主な婦人伝道局がニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴにあることが最初わかっていました。同じような名前の資料群が分かれてあることの意味を理解するのに半日かかりました。時間がなくて、コピーをほとんどオーダーし、マイクロフィルムになっているものはそのコピーを購入することにし、次から次へと関連のありそうな資料を持ってき



てもらいました。小柄な白人男性資料館員が、それに根をあげて、「オーダーが多すぎる！」と抗議してきました。すると、カウンターにいた黒人女性が、「この女の子は、はるばる太平洋を渡ってきたんだよ。いいじゃないの」と言ってくれました。どんなにありがたかったことか！

フィラデルフィアの次にニューヨークに行きました。いくつかの資料館と図書館を回って、メアリ・E・キダの資料を集めるのが主な目的でしたが、フィラデルフィアほどの成果はありませんでした。ただ、ブルックリンを歩き廻ってキダの足跡を辿り、彼女が住んだアパートを見付けたときはうれしかったです。一眼レフカメラを首からさげて、通りや建物の写真を撮影しまくっていたら、通りかかった人に、「何の取材？」と声をかけられました。ジャーナリストに間違えられたのです。

NYC を後にして、アルバニ行きの列車に乗るときには、大きなトランクにバックパックを背負い、さらに、段ボール箱3つ分の資料を簡易カートに乗せて引っ張るという、超人的な姿でした。キダの子孫のナイト夫妻が駅に迎えにきてくださって、車に乗ったときは本当にほっとしました。その日夫妻はアメリカで最初に高いレベルの女子教育を行ったことで有名なエマ・ウィラード学校とアメリカで最初の海外伝道団体であるアメリカン・ボード発祥の地、ウィリアムズ・カレッジに寄っていただきました。

ナイト夫妻の山の中の家に泊めていただき、翌日からメアリ・E・キダのアメリカ時代を辿る旅に連れて行ってもらいました。マーガレットは元高校の歴史の先生だったので、ご自分の先祖について調べており、主要な学校や図書館にはあらかじめ連絡を取っておいてくださいました。

最初に行ったのは、ヴァンモント州ワーズボロ。キダが生まれて育った山間の村です。何も無いところでした。かつての会衆派の教会は残っていましたが、今は使われておらず、メインストリートと覚しきところにも店はほとんどない。ヴァンモント山間部の地味は貧しく、一代で瘦せてしまい、キダの時代にはすでに人口流出が始まっていました。そんな村でも、ニューイングランドの情報網にはきちんと入っていました。たぶん、教会のネットワークが機能していたのだと思います。キダの叔父は、4人が大学で学び、3人が牧師になっていました。キダは7人兄弟姉妹(夭折しなかった)の4番目でした。キダは彼女自身の記憶によれば、トム・ボーイとして育ち、兄のマイロン、妹のマルヴィナ・マリアと並んで、当時としてはレベルの高い教育を受けました。

次に訪ねたのは、ワーズボロから東に30キロほど行ったタウンシェンドという町。そこにあったリーランド・セミナリ(中等教育機関)でキダは学び、回心を経験しました。学校のカタログでは1850年に在籍したことになっています。この学校は、現在はリーランド&グレイ中学・高等学校になっています。さらに、この町から北東に40キロほど行ったサックストンズ・リヴァーという町に行きました。ここには、かつて町の名前を冠したセミナリがあり、メアリ・E・キダは1852年の秋学期(9月から11月まで)にその古典部に所属し、絵画や音楽のクラスも取っていた記録が残っています。

キダはこのような、断続的に家から離れた学校で学び——学ぶときは下宿していたようです——、1855年、21歳でマサチューセッツ州モンソンのモンソン・アカデミに入学しました。モンソン・アカデミは当時評判の高い学校でした。1971年頃別の学校と合併してモンソンから消えましたが、私が町を訪ねたときには、まだ、廃墟となった校舎がいくつか残っていました。キダは、1855年度に女子古典部に在籍し、さらに55年度冬学期と56年度には助手として女子英語部で教鞭をとりました。

キダはこの学校で、海外伝道との具体的につながりを持ったと考えられます。モンソンは、中国で伝道したサミュエル・R・ブラウンの故郷でした。ブラウンは1847年に3人の中国人青年を連れて帰国し、モンソン・アカデミに入学させました。ブラウンはその後、ニューヨーク州アウトレットのオランダ改革派のサンド・ビーチ教会の牧師となり、オーバンのスプリングサイドで男子校を運営していました。モンソンには、アカデミの近くのブラウンの生家がまだ残っていて、使われていました。そこを見にいきましたが、ほんとに小さな家でした。ブラウンは大変著名な教育者、宣教師です。こういう慎ましい家から人物が出たんだとびっくりしました。

ナイト夫妻との私の旅はここまででした。この時はニューヨーク州北西部まで行くことはできなかったのです。例の段ボール箱に詰まった資料は、ナイト夫妻に手伝ってもらって、郵便局から日本に

送りました。

キダは、モンソン・アカデミを通じて、ブラウンと出会ったと考えられます。卒業すると、上に挙げた、ブラウンのスプリングサイドの学校の教員になり、サンド・ビーチ教会の教会員になりました。キダは、そこで、1859年にブラウン一行が日本に伝道に出るのを見送りました。一行には、有名な宣教師フルベッキの妻となったマリア・マニオンも含まれていました。マリアはキダと同じサンド・ビーチ教会員でした。キダが教師として働いたブラウンの学校のあったオーバンは、後に訪問しましたが、実に興味深い革新的な町です。19世紀前半には信仰復興が盛んに起こった地域に属しました。オーバンの話は今日は時間が無いので、割愛します。オーバンの近くのセネカ・フォールズで1848年にアメリカで最初期の女権大会が開かれたことだけ付け加えておきます。

その後、キダは、教師として自活するために、ニュージャージー州オレンジ、そして、ブルックリンへと移り住みます。ブルックリンでは、旧知のミス・ラニの学校で教え、近所の会衆派教会系の慈善事業で奉仕し、日曜学校で教えて過ごしました。私がブルックリンで見付けた(上に紹介しました)デグロ通りのタウンハウスは、当時キダが住んでいたところです。おそらく、単身ではなく、何人かの女性たちとそこに住んでいたでしょう。1867年、キダは、ブラウンから一時帰国の知らせを受け、女子教育を日本で始めるために、宣教師として日本に行かないかと誘われました。2年後、キダは、完成したばかりの大陸横断鉄道に乗ってアメリカ東海岸を後にしたわけです。

2週間のアメリカ旅行で得た資料、経験は、博士論文となりました。その後、それを短くしたものが私の最初の出版物となりました。『アメリカ婦人宣教師——来日の背景とその影響』(東京大学出版会、1992年)です。

この本は、1859年以降、日本に居たプロテスタント宣教師のマジリティはアメリカ出自であること、その中の少なくとも60パーセント、時期によっては、3分の2が女性宣教師であったことを明らかにしました。それまで全く注目されてこなかった宣教師の妻も、役割を持つ準宣教師として任じられていることを指摘しました。海外伝道は女性化していたのです。当時の日本では新しい指摘でした。

そして、宣教師を送るために、「婦人伝道局」という女性たちの海外伝道のための組織があったこと、19世紀の女性宣教師は、中流階級の出身で、平均よりやや高い教育を受け(中等教育修了、より良い場合は、師範学校出身)、教師の経験があること、キリスト教信仰は、いわばこの階層にとってデフォルトであることなどを指摘しました。これは、後の本で書いたことですが、19世紀アメリカはキリスト教自体が女性化しており、敬虔であることは、理想的な女性の条件の一つでした。経済的・政治的機会が極めて限られていた女性たちにとって、教会と結びついて「道徳の守護者」として発言力を高めることは、唯一権力にアクセスする道だったのです。言ってみれば、女性の宣教師は、ごく普通の白人中流女性であり、無名の人でありました。本の中にキダのアメリカ時代を書きましたが、一つのケーススタディとしてこうした論点を補強しています。中流女性にとって職業機会が極めて限られていた19世紀、宣教師として海外に赴くことは、その前半においては、命の危険を伴う犠牲的行為でもありましたが、後半においては、冒険とより有利な生涯のキャリアの機会という側面が強かった。19世紀後半、宣教師に応募する女性は多く、リクルートに困ることはあまりありませんでした。

メアリ・E・キダは、そうした小さき者の一人でした。決して特別に偉大な女性というわけではありません。勤勉で、冒険心があり、当時の中流女性として十分敬虔でありました。でも、当時のアメリカにおいて、どちらかというと、傑出したというより普通の、という形容詞が似合う女性でした。そんな女性がアメリカから日本に来て始めた小さな教育の試みが学校に育ち、それが日本の近代女子教育の始まりであり、155年後の今日まで続いているというのは、奇跡ではありませんか？そこには多くの人々の関わりがありました。こうしたことをキリスト教の言葉で表現すると、神の御業、神が予定されたこと、と言うのでしょうか。

考えてみると、フェリス中高に学んでキリスト教に疑問を抱いた反抗的な私が、その疑問故にアメリカのキリスト教の歴史を研究するようになり、今、学長としてここに立ち、こんな話をしているのは、不思議です。人知を超えたものだと思っています。

2025年度 アジア学院スタディツアー報告 アジア学院スタディツアー ～繋がる～ M・H（グローバル教養学部 国際社会学科1年）

6月14～15日の二日間、アジア学院ツアーに参加しました。

アジア学院は、栃木県那須塩原にあります。アジア学院の教育理念は「有機農業を通してリーダーシップを学ぶこと」です。東南アジア・アフリカからそれらの地域のリーダーの立ち位置にある人々がアジア学院で一年間ほど学び、そして、国に帰りアジア学院での学びを通して村を活性化させられることが最終目的です。

アジア学院ツアーに参加して、沢山のことを学ぶことが出来ました。一つが、命は繋がっているのだと実感したことです。

皆さんはコンポストをご存じでしょうか。コンポストとは生ごみや落ち葉などの有機物を微生物の働きを活用して発酵・分解させ堆肥に変えるためのプロセスを言います。コンポストによって堆肥に変えられる発酵途中の土壌に触れた時に、土が温かかったことにとても驚きました。土も生きているのだ、と感動しました。土から、植物が芽生え、牛や豚、鶏などの命へとつながり、そして私達の命へと繋がっていることを実感しました。

そして、私たちが何気なく過ごしている普通の生活が、「普通」になるのには沢山の犠牲の上で成り立っているのだと改めて感じました。

アジア学院での、様々な人々が暮らしているからこそそのチャレンジも知りました。

アジア学院にも教会があるのですが、牧師さんに一番難しいことは何でしたかと聞く機会がありました。牧師さんは「様々な人々と暮らすことが難しいことだ。」と仰っていました。アジア学院には様々な人が集まって有機農業を学びに来ています。文化も、宗教も違う中で、どのように調和を保ち暮らしていくのか、これらのことは「challenge」と仰っていました。完結することではなく、課題として挑戦し続けていくといった思いが感じられました。現代の日本社会にも必要な「challenge」ではないでしょうか。

今回のアジア学院ツアーをきっかけに、様々なことを見直せる良い機会になりました。皆さんも、機会がありましたら是非、アジア学院ツアーに参加してみてください。

2025年度 サマートリート報告 8月6日(水)

平和を祈るチャリティーコンサート ～パイプオルガンの音色を楽しもう～

戦後80年を覚え、チャペル（緑園キャンパス）にて、サマートリートが行われました。学生・卒業生・教職員17名の参加者が与えられ、音楽の音色とともに、感謝と賛美をおささげしました。

プログラムは、第一部「広島のための祈り」、第二部「悔い改め」、第三部「平和の祈り」、聖書の御言葉、賛美と祈りとともに、荒井真先生、相澤一先生、秋岡陽先生にメッセージをいただきました。今年度の年間主題「平和を造る人々は、幸いである」というマタイによる福音書の御言葉を分かち合い、ゆるしと悔い改めについて考え、フェリス女学院の教育理念である For Others の精神に、改めて心を向けました。

司会・聖書朗読は学生が担当し、パイプオルガンの独奏、学生によるソプラノ独唱、賛美と祈りをもって平和を祈る、恵み豊かな時となりました。

サマートリート参加者（卒業生）より

私は大学院在籍時に聖歌隊で奉仕をしており、修了後4年経って受洗しました。フェリスの緑園チャペルは私にとって信仰の故郷であり、卒業後もあたたかく迎えていただき、信仰に繋がれて帰る場所があることは、言い尽くせない豊かな恵みです。この大切な時期に、聖書のみことば、先生方の叡智と優しさに満ちたメッセージ、美しい音楽と共に平和について祈りをお捧げでき、嬉しい一時でした。本当にありがとうございました。また、一緒に祈らせてください。

（2014年大学院修了 田中 綾乃）

